

## 「初恋」はいつの時代も

三年D組の国語を途中から参観しました。扱っていた教材は、島崎藤村の「初恋」。国語の授業として興味をもっただけではなく、現代の中学生がこの詩にどんな反応を示すかが知りたかったので、終わりのチャイムが鳴るまで滞在してしまいました。

島崎藤村は現中津川市馬籠（まごめ）に生まれました。馬籠に彼の記念館（藤村記念館）があり、彼について学ぶことができます。彼の初めての詩集『若菜集』に、この「初恋」という詩が収められています。そして、この詩によって彼の名は日本中に知れ渡りました。

「初恋」と言えば、現代も何人かの歌い手が同様のタイトルで曲を出しています。中学生にはわからない名前もあるでしょうが、村下孝蔵、宇多田ヒカル、そして、*Utada*が「初恋」という曲を歌っています。それらの歌詞を見てみると、藤村の詩とは違う点が一点あります。それは、三人の歌詞の恋は、片思いということですが、男性の視点からであって女性視点からであっても、まだ成就しない恋を「初恋」として表現している点が共通しています。恋心が相手に届かない前のせない思いがそれぞれの曲で表現されています。

藤村の「初恋」は違います。「出会い」から「成就」までのストーリーが四つの連の中に七五調で表現されています。「せつなさ」というより、「ほほえましさ」を感じさせる、ストーリー性のある詩となっている点が、今の時代の歌詞とは違うところだと思います。

授業では、T教諭が詩の内容を丁寧に指導していました。文語調の詩である分、理解が難しいと考えたのでしよう。私はそれを聞いていて、T教諭の「（この詩のすばらしさを）伝えたい」という思いがひしひしと伝わってきました。しかし、詩の中の「林檎（りんご）」に象徴されるような初恋の甘酸っぱさが、彼らにどれだけ理解できたかは正直言ってわかりませんでした。

ここが難しいところだと思います。中学時代は思春期真っ只中。しかし、この思春期には個人差があり、恋についてはすでに経験した生徒もいれば、まだ経験していない生徒もいるはずですが、前者にとってこの詩は、違う時代に生きていても共感できる場所があるでしょう。後者にとっては、共感までは至らないにしても、恋についての興味関心は刺激されることでしょう。それを表に出さないのが思春期の特徴です。

いずれにしても、大切なのは異性に好意をもつということは、いつの時代も変わらないことであり、詩を初めとして、小説、歌謡、映画、テレビドラマなどにとっては、欠くことのできない永遠のテーマとなっていていきます。したがって、それを過去の人々ほどのように表現しているかを、恥ずかしがらないように学んでほしいと思います。

好きな人ができたときには、スマホやPCを使っていつでも声を聞いたり顔を見たり、はたまた、気もちを確かめたりできる時代となりました。昔の人々も思いは同じです。しかし、手段は違います。表現の仕方も異なります。今の時代が最も優れていると思わず、謙虚にそれらを知ろうとすることが大切です。それが文学のおもしろさにつながりますからね。（一月十二日 記）

